山田安民　篇１

胃腸薬と目薬

山田安民は、津村重舎の実兄で、彼らの実家は、宇陀市榛原池上にあります。

安民は、明治 32 年（１８９９）、 31 歳の時に大阪市内で「信天堂山田安民薬房」を創業し、胃腸薬「胃活」発売をはじめました。「万病の元は胃にある」と確信し、効き目のある胃腸薬の発売こそ、これからの日本に必要と考えたのでした。「胃活」は、「胃病に胃活、泣く子に乳」などと宣伝されて、大ヒット商品となりました。

日露戦争終結後、トラホームが流行し、目薬の需要が高まっていました。安民は明治42年（１９０９）には、点眼薬（目薬）の発売をはじめました。ドイツ・ミュンヘン大学のアウグストフォン・ロートムンドに師事していた眼科医が処方した点眼薬を調製し、発売しました。目薬の商品名は、ロートムンドの名前から「ロート目薬」としました。商品名にカタカナの「ロート」を用いることによって、既存の目薬にない斬新さが注目され、この目薬も大ヒット商品となりました。この目薬も順調に売り上げを伸ばし、胃腸薬と並ぶ２本柱となりました。

当時、目薬は、目薬の入った本体容器と点眼器の２点セットで販売されていましたが、山田安民薬房の若主人・山田輝郎（安民の長男）は、これを一体型に改良したいと考えました。輝郎は、上下に口のあるガラス瓶を作り、上の口にゴムキャップをかぶせ、ここを押すと下の口から目薬が出る方式を考案し、昭和６年（１９３１）には、新容器「滴下式両口点眼瓶」として発売しました。この新容器は、点眼の手間や衛生上の問題を解決し、目薬業界に大革命を起こしました。